

はくさん



第1卷 第2号

も く じ

アメリカで見た自然と保護—その1—	四手井 綱英	1
サルカガミの話—白山麓のニホンザル伝承—		
	広瀬 鎮・水野礼子	3
白山室堂平の園地と柵—白山の植生2—	菅沼 孝之	6
山日記		7
図書・資料紹介		8
センターたより		8
展示案内		9
表紙解説 ハイマツ		10

普及誌「はくさん」の編集方針について

「はくさん」は、白山地域の自然および自然保護の正しい理解と普及のため、ひろく一般のかたがたに読んでいただくことを目的とした普及雑誌です。

いろいろな内容のものが掲載できるようにしたいと思いますので、各方面のかたに原稿をお願いするとともに、自然や自然保護に関心をおもちの方の投稿も歓迎いたします。

なお、普及雑誌ですので、行政的な問題や専門的な学術論文などは、おことわり申しあげることがあるかと思えます。

(研究普及課)

アメリカで見た自然と保護 —その1—

四手井 綱英

1972年夏2カ月半アメリカの東部テネシー州とバージニア州の境にあるグレート・スモーキー国立公園、西部の太平洋岸西北部地方のワシントン州にあるオリンピック山国立公園、レーニア山国立公園を短時日ではあるが旅行し、またオレゴン州の国有林シュスローフウィリアムメッテ内にあるカスケード・ヘッド試験林とブルー・リバー試験林では、生産力測定を2カ月たらず行って来たので、今後の白山国立公園の自然保護にも参考になりそうなことを報告しておきたい。

国有林の管理・運営

アメリカの国有林のサービスは致ってよい。別に国立公園になっていない国有林でも、営林署の玄関には地図や写真集がたくさんつんであって自由にもらえる。地図も色刷りの立派なもので、これされれば自由に林内を歩き、走ることができる。交通標識の外に何号線という道路名が林道にもすべてついている。キャンプ地の指定もはっきりしているし、国有林内のキャンプ地では柄の長さいくらのシャベルと直径いくらのズックバケツが必要であるとか、本日は火事の心配はないなどということも営林署の玄関に掲示してある。

またどこへ行っても「Keep your forest green」の横長の緑色の掲示がある。さらにくずかごの設備もよく駐車場にはドラムかんがおいてあり、その上1/2マイル先の所にもう1/2マイルでくずかごが有りの掲示がいぎとどいている。

伐木のための副林道以外はほとんど総てアスファルト舗装である。

伐木方法はあまり感心したものではない。大凡そ5~10ha、広い所で20haぐらいを団状に皆伐している。近頃は、ここでも自然保護が強調されるため、伐区は次第にせまくなってきているようである。

しかしなにしろ平均樹高が60mをこえる大径林の多い森林であるから、日本の天然林とことなり、面積当りの取量は著しく大である点、皆伐の伐区縮少は日本より有利に進められるであろう。

連続しては伐採を行なわないので、こうした皆伐地が点々と各地に散在することになる。この点、日本の林野庁が行なって来た一流域を数年で皆伐してしまうやり方とはことなる。



国有林の掲示版 1

地米太平洋岸は冬雨地帯で10月中旬あたりから3月終りまで多雨である。同じ気候をもつ地中海とは異り、冬の雨期は著しく多雨で、コースト・レンジやカスケード山脈は3000mmに近い雨が冬期に降る。夏は快晴続きであるが、霧がほとんど毎朝おきる。日本とは全くことなつた気候帯であり、これが針葉樹の成育に適し、暗湿帯林から亜寒帯まで谷間のハンノキ林以外は針葉樹でおおわれてしまうのである。しかも伸長がよく、例をあげると樹高64mあつたダグラス・ファーがわずか100年しかたつていなかった。つまり100年間平均60cmを越えた伸長をしていたのである。最も良い生長を示すあたりでは年80~90cmものびていた。

夏乾くので山火事に対する注意はすこぶる厳重で、毎日山火事の危険度が、各地に掲示され、行楽客、キャンパーに火の取り扱いの注意をうながし、携帯品にも、火事をとめる道具の携行を規定している。

西部では、定着したものや、道路(鉄道)建設に功績のあつた人々に、国土を1マイル

角に区切って一つおきに分配した。

そのためオレゴン州の一部ではモザイク状に国有・私有が交互にならんでいる所がある。こういった所では、近年私有林が所有地全部を伐採したりするので、森林全体がアバタ面のようになつている所も多い。またインディアン^①の特別保護区などでは、インディアンが森林を業者に売り広大な皆伐地を生じている所もある。

オリンピック山国立公園の周辺にはこうした所も多く、ここはインディアンが伐つたという弁解を大分きいた。当時としては別に問題ではなかつたろうが、今となつては自然保護上大きな問題になつている。

次に Forest Service の出した地図に記されたキャンプの注意を参考にあげておく。

1. キャンプ地をきれいにしよう。
2. 水を汚さぬようにしよう。
3. 林内の標識を保護しよう。
4. 釣や狩猟の法律を守ろう。
5. 森林官のいうことを聞こう。
6. タキ木やテントの支柱に生木を伐るな。
7. 林内でキャンプし、牧場や林内空地をよごすな。
8. 道路を走る車のなか以外は旅行中禁煙しよう。
9. タバコはかがとや岩や土ですりつぶし、マッチは消してから捨てよう。灰入れを使おう。
10. キャンプ・ファイアーは適当な空地で行い、可燃物を遠ざけること。そして大きくしないこと。
11. キャンプ・ファイアーは常に監視し土と水でよく消すこと。そして消えたかどうかたしかめること。
12. シャベルとオノと水ノウをつねに携行すること。
13. 出来れば、放置されたタキ火を消しなさい。出来なければ、もよりの森林官へしらせてほしい。"あなただけが山火事を防げる"ことを忘れるな。

(京都大学農学部)



国有林の掲示板 2

サルカガミの話

広瀬 鎮・水野礼子

人々の生活様式に地域的特色があるように、地域住民のニホンザルをめぐる動物観、サルへの禁忌や、民間伝承の残り方に著しい差があることが明らかになってきた。

ここでは2回にわたって石川郡吉野谷村と鳥越村でのニホンザルの伝承と、尾添川に沿った地元住民におけるサルへの関心例をめぐって若干の報告を試みる。

調査は1972年10月に下吉野、鳥越、中宮地区を対象として、現在伝えられているニホンザルの伝承形態について聞き込み調査を行ったものである。この報告では、下吉野、鳥越周辺でのニホンザルに関して収録された伝承と記録を紹介し、住民の生活意識の中にひそむサルという動物に対する考え方をめぐる考察点をあげてみたい。

吉野地区は幕藩時代において幕府の巡士がやってくる時には、土地の実態をかくすために吉野十景を指定して平地部を通さなかったと伝えられている。小松—三坂峠—吉野—鶴来を通して白山へ行く。したがって下吉野は中継点であるということもあって、幕藩時代の憩の場となり、加賀藩の観光地でもあった。鳥越村史によれば、古墳出土物の中の動物としてあげられているキツネ、アナグマ、ツル、クマ、ノウサギ等の中にサルも含まれており、古くからサルは鳥越周辺に住んでいたと考えられる。「吉野十景考」にも「寒猿叫」等の記載がみられ、吉野周辺もかつてはサルの姿がみられたものと考えられる。

江戸時代末期文久3年(1813)における、鶴来、白山村、下吉野、上吉野村等白山山麓地帯の各村の様子、自然、生物にわたる状態が記録されているものに、横山政和著の「小松近郷巡見道之記」がある。

横山藏人政和については「加能郷土辞集」(日置謙編)にくわしいが、横山政和は天保5年に生れ、明治26年に故した。この著は文久3年著者30才の時の道中記であり、当時の役人の忘備録ともいうべきものではあるが、興味あることに、横山政和は周辺の自然にも強い関心を寄せており、しばしば、生物の生息や、捕獲の話題が記録されて今日の我々に往時の自然の状態を明らかにしてくれるのである。

さて、「文久三年八月廿一日金沢出立翌廿二日小松着三坂峠」と題した記述中に釜清水村についてふれた項があり、「猿鏡」の地名が出現する。以下にその記述を紹介する。

釜清水村

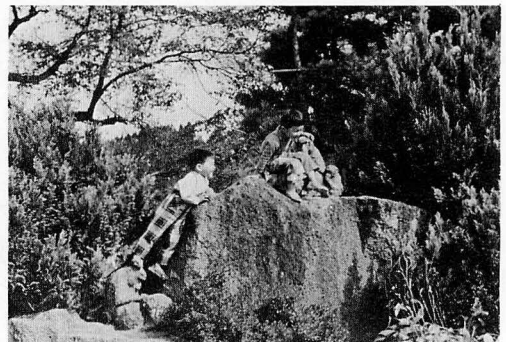
オ許十村鈴木次三郎ト云者此村ニ居住ス其庭ヨリ川向ニ雲龍山能見ユ此庭絶景也庭ノ内池ヲ踏ハ鳴ル是川岸ニテ其下空虚ナル故也門ノ方低キ所ニ巖石ニ穴アリテ其形下広ク釜ノ如ク其内ヨリ清水湧出是自然ノ泉也此水此一村ヲ養フ旱魃ニモ減スル事ナン所者云昔弘法大師杖ニテ突玉ヒシヨリ出ル水也ト是釜清水ノ名ノ起ル所也下レハ下ニ河原アリ其所ノ淵ヲ猿鏡ト云(後略)とある。下吉野の山本重孝氏の記憶によれば、戦前までは吉野十景の

中心の黄門橋には老猿が1匹住みついでいて、時々出てきたということであるが、この黄門橋下流100mの川底にサルカガミと呼ばれる場所があって、文政年間(1818—1829)加賀藩士、田辺正己という人の書いた吉野別宮辺りの「名所街道記」に「猿屈」とかかれており、また釜清水の十村(鈴木家)の手鑑に「猿鏡」とも記載されている。「屈」と「鏡」の二字があてられているのであるが、この猿鏡について山本重孝氏は以下の如き物語を紹介してくれた。「このあたりには、サルが住んでおりました。名主の次郎左エ門の後の手取川の川底には、深い淵があり、静かな水面は小波一つなく鏡のようにすんでおりました。

その淵の崖の上には老松が茂り、大きな枝をさし出しておりました。サルたちはこの松の木に登り枝から枝へ器用に飛びまわっておりました。丁度中秋の名月の日にあたったのでしょうか。淵にうつった月影は大きな輝く黄金の玉のように見えました。「アレ!あんな美しいこがねの玉がおちているぞ。」「人間どものほしがる黄金の玉にちがいない。」「とろうじゃないか。おいらサルの村の宝にしようよ。」と相談がすぐにまとまり、淵にうつる黄金の玉をひろいとることになりました。サルたちはサルグサリを作るという特技中の特技があります。第一のサルから順々に何十匹ものサルグサリがまたたくまに出来ました。一番最後のサルが水面近くに達する頃には第一のサルの手の握力は限界に達しておりました。「よーし、あと一いきだ。」と最後のサルが水中に手を突きこもうと一力ひとりきみしました。第一のサルの手が松の枝から離れてしまいました。サルグサリがきれて何十匹ものサルが

バタバタと淵におちて行きました。静かな水面は、あわてふためき我先に逃げまどうサルたちにみだされて、大波小波がたち、黄金の玉は千々にくだけてしまいました。けれども一ときもすぎますと、さゞ波一つない静かな水面となり、丸い黄金の玉が底深く輝いておりました。それからだれ言うとなく、この淵のことを猿鏡と呼ぶようになりました。」

以上のような物語りであるが、このようにサルが長くさりを作るという民話は、猿橋さるばし、猿猴掬月のモチーフのあらわれとして全国的に流布されており、現在各地にサルの浅知恵、高望みのいましめとした寓意に富んだ絵画と伝承が残されている。かつてこの猿鏡の場所にはマスが極めて沢山みられたといわれているが、東北地方では、サルのことをマスと云い、猿名のかわりにマスを使用した地名等が多いので、単にかつてサルが住んでいただけで猿鏡伝承の発生を考えることは出来ない。先述のごとく、釜清水の地名の起源についてであるが、水の湧き出ずる所には多くの霊威伝説が各地に残されており、釜清水村の場合も、その例にもれない。ただ、サルは、清水をみい出す能力があるとされた動物であったので、この湧水伝説と、この地形のもつ特色が、猿鏡伝説を生み出す背景ともなりえたのであろう。現在此の地には猿を祀ったり、サ



ルをおそれたりする伝承は全く存在していなかった。さらに小松近郷巡見道之記には尾小屋村の項に野生の猿についての記録が残されている。

九月廿七日小松出立御墳月巡見十月二日小松着

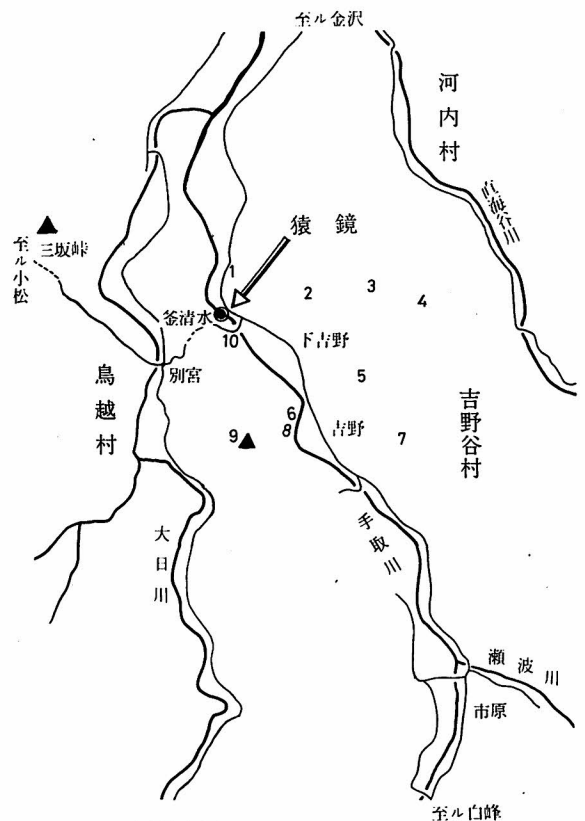
尾小屋村

尾小屋御口留所ヨリ公領境迄一里丸山迄二里此辺二三年林ノ丈ヨリ一尺計モ上へ顯ル程ノ大熊出シ事アリ同所ニ鴨足粟多ク作ル此附近ノ食ナリ峠アリ尾小屋峠ト云上リ一里阿手迄下リ一里又峠ノ間ヨリ三湖小松辺見ユ峠ヲ過正面ニ公領杖ノ高ノ崖見ユ此頃粟多シ峠ノ右谷ノ向ナル高く近キ山ヲ大倉ヶ岳ト云其谷ヲ岩底谷ト云 猿多シ

この記録により、大倉ヶ岳にサルが生息していたことが明らかとなった。今回の調査のみでは不十分なので今後も丹念な地域・自然の記録を収集したいと考えているが、ニホンザル伝承に関しては、下吉野では、サルに関しての禁忌や、サルを祭る信仰は存在していない。ニホンザルをめぐる口承がこのように乏しいという点は、手取川をさらにさかのぼった白峰地区と対比してみると興味が深い。白峰地区はサルに関する民間伝承が豊富であり、尾添川にそった中宮・尾添地区とくらべてみても特にサルへの侮蔑・嘲笑といった伝承が伝えられて、住民生活の中でのサルに関した多様な口承が存在しているのである。いまだ十分な分析にはいたっていないが、伝承の成立や、伝播にひそむ、自然および社会の関連を明らかにしたいと考えている。

下吉野における現代におけるサルにかかわる事象に、鳥越小学校校庭に7匹のニホンザ

ル像が、津賀田勇馬氏によって製作されているが、これは戦後二宮金次郎像のかわりに、オトギの像をつくるということになって、白山ザルと称するサル像を作ったがモデルは粟津のサル花のサルという。(このサルは香川県小豆島よりの移住群よりの繁殖個体であり、興味ある背景があるが、ここでは触れない。)この他に手取川五ヶ村長が全員サル年生れであり、五ヶ村協調の話題として選挙演説において語られたということであるが、日本人の意識の中にあるサル観は十干十二支とのかかわりあい根づよく存在し、伝統的なものと云えるのである。(日本モンキーセンター)



吉野十景

- | | |
|-------|--------|
| 1 月影沢 | 6 飛竜岸 |
| 2 雲流山 | 7 白布滝 |
| 3 仙雲峰 | 8 高月池 |
| 4 太白山 | 9 虎狼山 |
| 5 鉢峰山 | 10 黄門橋 |

白山室堂平の園地と柵

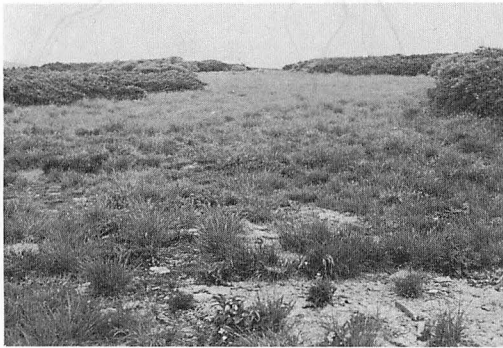
—白山の植生2—

菅沼 孝之

白山室堂平は白山比咩神社の奥宮の境内地であり、白山において平坦な地形を示す最高海拔地である。ここには、奥宮の祈禱殿をはじめとして室堂ビジターセンター、宿泊施設があり、周囲は植物園地として手軽に高山植物に接することができるようになっている。

いま仮りに、室堂平の園地を御前峰への登山道を境にして東と西の両地区に分けて呼ぶことにする。西地区には水利施設などがあり、裸地も多く、また小径があちこちに走って、全体的に荒れた感じを受ける。それに対

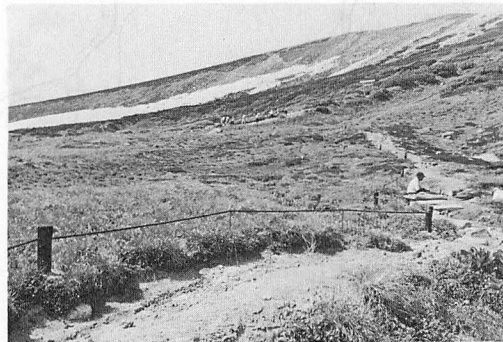
して東地区は一応緑でおおわれているが、園地の遊歩道は降雨で洗われてかなり荒廃している。とくにこの地区は過去にキャンプが許可されていたことがあり、平坦地は裸地同然になっていたのが、キャンプを禁止されるとともに次第に回復して、タカネコウボウというイネ科の植物を優占種とした群落になった。だから一応緑におおわれているものの、この地域の微細環境にあった極盛相にまで発展するにはまだまだ時間がかかるものと思う。



荒廃地を緑化するタカネコウボウ



ミヤマキンバイークロユリ群落に移行する園地。イネ科の草むらはタカネコウボウ。



柵がつくられ遊歩道の補修がすすむ室堂平園地。今年には残雪が多い。



美しく咲き競うコバイケイ
(写真はいずれも1973年7月22日に撮影)

この園地にはハイマツやナナカマドの叢林や、クロマメノキやクロウソゴの矮性化木林や高山草本群落が見られる。これらの詳細については稿を改めるが、いずれも長い長い冬にうちかって、辛うじて生活している植物たちで構成されている。だから些細な環境の変化、たとえば人が踏みつけるとか、流失した土砂で埋没するなどはこれらの植物にとっては致命的でさえある。

登山客はここ数年急激に増加している。そして宿泊棟の廊下を土足のまま闊歩する時世である。柵ぐらい作っても平気で踏み込む人らが多いことと思うが、せっかく回復しつつある園地を再び荒廃化に追い込まないために、やはり柵を作らざるを得ないのである。自然とのつきあい方を、登山客の皆さんに

知ってもらい、皆さんが実行して下さるまでの臨時措置である。

昨年立山に登って室堂附近の荒廃ぶりをこの目で見て、白山室堂の柵づくりに変な自信をもち、関係者を説得して歩いたのであるが、今年一部に柵ができたことに対して良かったと思っている。高山の自然を守るためにあなたにできる重要なことは道を歩くことですよ、とこの杭と縄が語りかけている真意を理解し、室堂平以外のお花畑も同様な心掛けでつきあってほしいのである。

柵をつくったことに対して、賛否両論ということであるが、それを主張した者の言い分を述べ、登山者のすべてが真の意味で山を愛する人になって下さるよう協力を乞いたい。

(奈良女子大学理学部)

山日記

今年の夏山シーズンも終わろうとしています。この夏の間、市ノ瀬で登山者のお世話をしてみると、いろいろ知ることが多くありました。

テレビやその他で、観光地のゴミ公害がなにかと話題になっていますが、ここ白山では、「美化登山」が相当みうけられ、印象的でした。

始めから美化登山という名のもとに登って下さいました方々、学校生徒の団体登山で道すがら、タバコのすいがらまで拾い集めて下さいました高校生や中学生のみなさん、まことにありがとうございます。

白山はむかしから信仰の山として、石川・福井・岐阜の人々が守ってきたところで、郷土の誇る名山として、愛着もまたひとしおかと思えます。

この夏の7月に北陸鉄道山岳会の方々は、木製の立派なベンチを中飯場に作って下さいました。これは、登山者にとっても喜ばれるものと思えます。

私達が知り得た限り、奉仕活動をやって下さいました団体等の名称を記し、感謝申し上げます。

7月 白山麓連合青年団のみなさん

小松商業高校の生徒のみなさん

8月 白峰村白峰中学校のみなさん
金沢市上平小学校のみなさん

20才の健民登山に参加の方々、
金沢市菊川町内会の方々、

うえのみなさんのほかに、いろいろと奉仕活動をして下さった方々もあることと思います。お名前がもれました方々につきましては、深くお詫び申し上げるとともに、奉仕いただきましたことに感謝申し上げます。

(自然保護課)

ごみ持ち帰り運動展開中

“あなたが来るまではきれいだった”といわれないように

◇図書・資料紹介◇

北国新聞白山総合学術調査団編「白山」

少しまえのことになるが、昭和36年に北国新聞社が金沢大学のスタッフを中心に組織した調査団によって翌年刊行をみたのが、この本で、内容は自然・人文両分野を含め多岐に渡っており、いわば霊峰白山のモノグラフとも言えよう。

白山は古来より信仰の山として名高く、自然と人文を豊かに蔵しながらも、近時に至るまで総合的な調査は十分でなかった。このことへの反省が調査団編成をもたらしたと巻頭にある。白山が国立公園から国立公園へと昇格したのは、ちょうど、時を同じくしてのことであった。新しい時代の観光資源として開

発の促進に資するという趣旨もあったのだろう。

加賀・越前・美濃三国の白山信仰をめぐるかかわり合いは古く、それだけに複雑さを極めてきた。この辺の経過を各時代の背景などを含め解説してある歴史の部は、単なる史実の記載を越えた労作であり、現在も入門書として貴重であろう。唯、白山麓のいずれもの国が一向宗の里であったことを考えると、この点への配慮が今少しほしいところである。

限定出版でもあり、今では入手できなくなってしまったが、公的機関には広く蔵書されているはずである。

(花井正光)

〈B5版362頁 北国新聞社 昭和37年刊〉

たより

センター開館1カ月

開館後の1カ月間に、センターを訪ずれた利用者は、約4000名にものぼりました。センター案内の「しおり」が少なくなり、急いで補充するというありさまです。利用者が予想外に多いことに、職員一同うれしい悲鳴をあげています。

今後、ますます多くの方が利用されることを、願っています。

この1カ月の間、センターでは常設展示と自然観察園での解説のほか、映画会等を催してきましたが、これら以外にもいくつかの行事がおこなわれました。そのうちのおもなものを紹介します。

○野猿公園祭 これは吉野谷村の主催で、センターが協賛して7月8日に開催されました。梅雨季にもかかわらず晴天にめぐまれ、約500人の参加者を得て、盛大におこなわれました。

野猿の餌づけ場、ジライ谷の野猿観察園では、関係者の努力により、開館後初めてカムリア群（ジライ谷付近を中心にする野猿の群）があらわれました。糸田敬仁氏の説明に、参加者は心ゆくまでこれを観察できました。

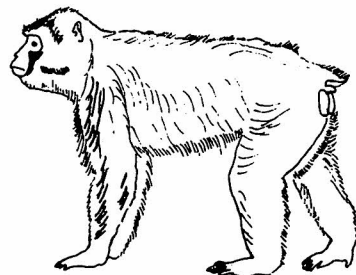
自然教室 全国一斉におこなわれる観光週間に協賛して、センターでは3会場で「自然教室」を開きました。

センター展示室；ここでは午前と午後の2回、映画会をもつとともに、野生の食用植物の特別展示をおこないました。とくに特別展示では、通常のものとは違って、来館者に直接手でふれて、いろいろ観察していただきました。「来館者が参加できる展示」を試したこの企画は、好評だったと思っています。

○ジライ谷野猿観察園；来館者の多くが関心をもっているこの観察園では、糸田氏の楽しい解説を聞きながら、野猿の観察ができました。

○白山山頂、室堂センター；白山観光協会のご協力を得て、山頂の「高山植物見本園」を中心に、高山植物探勝会をもちました。最後の夏山を楽しむ登山者達にとって、高山植物生態の観察は、大変意義の深いものであったと思います。こうした企画の中から、高山植物の保護が必要なものをも、御理解いただければ幸いです。

観光週間にとどまらず、随時こうした企画を実施していきたいと思っています。より多くの方々の参加を希望しております。



◇ 展示紹介 ◇

白山自然保護センターでは、室堂センター・市ノ瀬登山センターとともに、利用者に自然に対する興味と驚きを感じてもらい、自然と人間とのかかわりのあり方を正しく認識してもらうよう、展示室を設けました。

展示室は白山の自然への入口です。ここで興味をもって自然探勝へ、そして登山へと、生きた自然の中へ出かけて下さい。

この展示は、研究者、利用者などのアイデアと資料の提供によって、より充実していくものです。

展示テーマ

- 白山の四季……………山の自然は四季折々に変化し、その美しさや厳しさを見せてくれます。生きものたちも季節に応じてそれぞれの生活をしています。
- 手取湖と火山……………約1億年前、白山一帯は手取湖という湖でした。そこに隆起と火山活動が起って山になりました。
- 白山に降る水・雪…白山地域に降る雨と雪は手取川、九頭龍川、庄川、長良川の4大河川に流れ、広い地域の土地と人々をうるおしています。
- 植物の高度分布……………高度によってブナ林、ダケカンパ林、ハイマツ林、高山草原と植生が変化します。また白山では日本海側と内陸側で植生の分布がちがいます。
- 野鳥の移動……………野鳥には夏は標高の高いところへ移動するものがあります。イヌワシやホンガラスは中山帯と高山帯を季節によって住み分けています。
- 化石……………白山にある中生代の手取統という地層は、植物化石の豊富なことで日本でも有数といわれます。
- 温泉……………白山火山帯の名の由来となったこの休火山には、山麓のあちこちに豊富な温泉が涌出しています。
- イワナの食物連鎖…生物は単独で生活するものではありません。イワナも多くのものを食べ、いろいろなものからねらわれています。
- サルの遊動と食物…食物を求めて、豪雪をさけて、ニホンザルも移動します。季節によって食物も変わります。
- 人の暮らしと自然…白山麓は古くから出作り耕作や焼畑を営み、独特な自然とのかかわりあいをもってきました。
- ヒトと動物……………動物に対してもさまざまな形で人は智恵をしぼってきました。ウサギ猟にタカの羽音を出す道具を使ったこともあります。
- 他にホール、展示室中央では、各種案内、国立公園の紹介、動物や岩石の展示などしてあります。



展示室

われわれは自然に対して
あまりにも
無関心ではなかった
でしょうか。

表紙解説

ハイマツ

マツ科(ピナシー *Pinaceae*) マツ属(ピヌス *Pinus*) ハイマツ(ピヌス・プミラ *Pinus pumila*)

白山の2500 m以上の山頂部に、深緑の絨毯^{じゅうたん}でも敷きつめたように広がるハイマツの樹海は、長い年月の間、風雪にたたかれ、過酷な環境の中で群生するさまは「お花畑」と並ぶ高山の象徴である。

七月頃ハイマツの中を歩いていると、枝の先に淡紅色の小さな実のようなものが目につくが、これが雌花である。この花がマツカサをつくって実を結ぶのは、霜の秋を過ごし、氷と季節風の厳冬に耐え、春の陽に恵まれて漸やく育ちはじめたのち、二度目の夏を迎えてからである。

ハイマツの樹のほとんどは幹で、葉は上の方に薄い層をなしているにすぎない。この少ない葉で生活するのだから、春から秋までにできるだけ多くの日光を受けとめねばならない。春おそくまで雪が残るところでは生きることができないし、また、冷たい風の吹く冬には、雪をまとわないと芽が枯れてしまうだろう。こんなわけで、ハイマツが生育できるのは、冬は雪に被われ、春にはその雪が早くとけてしまうといった条件の満たされる限られた地だけである。ハイマツの大きさや生え方を観れば、冬期の積雪量の他に風の向きや強さなどについておおよその見当がつけられるというのもこの辺の事情によっている。

ハイマツは、このように厳しい限定された環境の中で、ほんの少しづつしか伸びることができない。それは、年に数ミリからせいぜい数センチだといわれる。こんな次第だから、一度切ってしまうと、数十年から数百年の間、もとへもどることができないのである。

(四手井英一)

◇ 編集後記 ◇

創刊号をお届けしてから2カ月たらずで、本誌第2号を発刊することができました。読者諸賢および執筆者各位のあたたかい御支援のおかげと、編集者一同、感謝しております。

本誌についての御比判や御意見が、そろそろ寄せられてくるころかと思っております。お気づきの点がございましたら、なんなりとお申し越しくださるようお願いいたします。

願いたします。

不慣れな雑誌づくりです。皆様の御教示をお待ちしております。

夏山のシーズンが終りに近づきました。秋風が吹きはじめると、山は一足はやく紅葉に色づきます。この雑誌を手には、初秋の自然保護センターを、再びお尋ね下さい。お待ちしております。

はくさん 第1巻 第2号

発行日 1973年8月20日

発行所 石川県白山自然保護センター
石川県吉野谷村中宮

印刷所 株式会社 橋本確文堂